

〈日本語教育学とは何か3〉

## 日本語非母語話者のテキスト理解とつまずき

——語彙と意味を中心に——

金 愛 蘭

### 1. はじめに

これは私が数年前に日本のある大学に務めていたときの話である。私の授業を受けている5人の留学生（中級前半レベルの中国語母語話者、韓国語母語話者、英語母語話者）とお昼ごろ校門の前ですれ違った。「先生、こんにちは。どこに行きますか？<sup>1)</sup>」と聞かれ、私は思わず「こんにちは。はい、ちょっとそこまで」と答えた。すると、学生たちは「そこはどこ？」「何をしに？」といったぐあいには繰り返し聞いてくるのだった。彼らはふだんの授業でも明るく、授業中によく質問をするほうだったので、もしかするとただ先生と少しコミュニケーションを取りたかっただけかもしれない。しかし一方で、彼らは「ちょっとそこまで」の辞書の意味は知っていても語用論の意味を知らなかったということも考えられる。つまり、外の関係にある人から「ちょっとそこまで」と言われたときに何度も詮索するような質問をすることの「重み」（他者への心理的負担）が十分に分かっていなかった可能性が高い。

上記のことは学習者が初級前半レベルの語彙だけでできている表現の語用論の意味が分からず起きたエピソードであるが、テキスト（文章・談話）の理解につまづくのは、非母語話者に限った話ではない。たとえば、母語話者の大人でも文章中に読めない漢字や表現があるとそこで文章理解が止まることはよくある。また、野球に詳しくない人に「赤ヘル」や「ツバメ軍団」といった表現が通じなかったり、誰のことを言っているのか推測できずイニシャルトークに参加できなかったりすることもしばしばある。このように、日本語非母語話者の言語使用から見えてくるものは、非母語話者特有の事象であることもあれば、母語話者にも当てはまる、ときには諸言語に見られるユニバーサルな事象だったりすることもある。

小稿では、日本語非母語話者のつまずきの例を具体的にあげながら、日本語学（主に語彙論・意味論）の知識が、日常生活とくに日本語教育にどのようにつながるのかについて少し考えてみたい。

## 2. 日本語非母語話者はどのようなときにつまずくのか

まず、母語話者も経験することなのだが、未知語つまり知らない語や表現に出会ったとき、そこでテキストの理解はいったん停止する。この一時停止は、表記や前後の文脈を手がかりに語の意味を推測できる場合はその後問題なく進むことができるが、最後までその「穴」が埋まらないままの場合もある。文脈等から推測する能力は、通常、手がかりが増えていく学習期間とほぼ比例するが、同様の学習時間であっても意味推測リテラシーには個人間でばらつきがある。

母語話者と非母語話者との間で意味推測リテラシーに差があると言われるものにオノマトペ（擬音語・擬態語）がある。オノマトペは、子供のときから自然に習得する母語話者にとってははじめて見聞きする語であっても何となく伝わるといことがあるのに対して、非母語話者の場合は母語話者のような推測が難しく、日本語のレベルが上がるにつれて単語として習得することはできても、未知語の推測能力は母語話者に比べてそれほど上がらないということが言われている。実際、オノマトペに習得上の困難を覚える日本語学習者も多く、留学生の日本語研究テーマの中でオノマトペへの人気が高いのもうなずける。

既知語つまりすでに知っている語でもテキスト理解につまずくことがある。まず、表記レベルでみると、類似する表記と間違っ認識してしまったり一部を読み飛ばしたりする場合である。読み間違いは、漢字だけでなく、平仮名と片仮名にも見られる。初級レベルだと、たとえば、猫vs描、電vs雲、話vs言、持vs待、読vs飲、親vs新 等<sup>2)</sup>があげられる。平仮名と片仮名では、あvsお、あvsぬ、いvsり、おvsす、さvsち、たvsな、ねvsわvsれ、ウvsワ、サvsリ、エvsコvs二、シvsツ、ソvsン、ヌvsタ、チvsテ などが混乱するという人が多い。

文節の把握ができず、一般に「ぎなた読み」または「弁慶読み」をしてしまう場合もある。本来「弁慶が、なぎなたを持って」と読むべきところを「弁慶がな、ぎなたを持って」と読んでしまう場合である。文字種の変わり目を語の境界として認識してしまったり（例：大変身に着けるのがお好きなご婦人でした）、複合語を一語として認識できなかったりする（例：住み替える）ケースである。このタイプにつまずきは、母語話者にもしばしば見られる。小学校教科書のように、仮名が続くときは語の境界を分かち書きで書き表せばこの種の読み間違いは起きずに済むのだが、実際の日本語文章はそうではない。入口に貼られた「ここではきものをぬいでください」という掲示を読み間違えることもあれば、インターネットサイトでよく見られる「スポンサードリンク」を「スポンサー/ドリンク」だと勘違いする人もいる。ある匿名掲示板サイトで「アフガン航空相撲殺される」というニューススレッドを「アフガン航空相、撲殺される」と解釈せず「アフガン航空相撲、殺される」と誤読する人が続出したという話も聞く。最近インターネットではやりのPCやスマホによる誤変換ジョークの中には、当該表現内での文節境界の

移動と別義のある語（と表記）への変換があつてはじめて成立するタイプのもの（例：今日、横はマイケル？←今日、横浜行ける？）も見られる。

日本語の上達と聞くと、単に既知語の数が増えるというイメージをもつ人もいるかもしれないが、既知語の別義を習得することも欠かせない。例えば、多義語「甘い」は、「果物やケーキ等が蜜の味がする・糖度が高い」という「味覚」を表す意味は初級前半で習うのだが、「考えが甘い」「脇が甘い」「詰めが甘い」「孫に甘い」といった表現における「非味覚」は中級以降のレベルで学ぶ意味<sup>9)</sup>である。これは筆者が日本に留学して間もない頃に経験したことであるが、スーパーで売られている鮮魚パックに書かれた「甘口」やレトルトカレーのパックに書かれた「甘口」の意味が「ケーキが甘い」とは異なることに気がついたのは留学後しばらく時間が経ってからで、甘い和食を好む日本人は魚にまで砂糖を入れるのだと驚いた記憶がある。

日本語特有の比喻や背景知識がないと理解できない表現にもつまずきやすい。「松竹梅」における植物としての「まつ・たけ・うめ」と吉祥のシンボルやランクとしての「しょうちくばい」との語義の差は明らかで、後者の意味を理解するのは「紅白饅頭」や「門松」、「お節料理（の中身）」等における百科事典的意味を理解するのと同じである。非母語話者がこれらの背景知識を習得してはじめて理解できると、母語話者がなぜ広島市内のコンビニが赤色で京都のコンビニやファストフード店が緑・茶・濃紺であるか<sup>10)</sup>を理解するのとは同じ次元にある。

語や表現における意味を理解するとは、文字面には現れない「行間」、つまり隠された意味を把握することでもある。語が「含意するもの」や「前提とするもの」を理解してはじめて本当の意味がわかるのである。「この部屋、暑いですね」と言われたら「窓を開けましょうか」や「エアコンをつけましょう」という返答が自然に出たり、「AさんはBさんほど素晴らしい研究者ではない」という文を読んで前提としてAさんもBさんも研究者であると理解したりするのは、これら文中の一語一語の辞書的意味を理解することではない。最近では、こういった「言外の意味」を習得するためには辞書的意味の指導とは別の学習法・指導方法が必要である、といったことが強調されている。また、習得が難しいとされる項目の一つである副詞にも同様のことがいえる。筆者が大学院生だった頃の話だが、ゼミで評判のお店でガーリックライスをいただいたとき、一口食べて店主の前で感想を求められ、「けっこうおいしいですね」と答えたところ、その場にいた先輩から「店主に失礼ですよ」という指摘を受けたことがあった。当時の私には「けっこう」が程度副詞であることは分かっているが、そこに「自分の基準に基づく他との比較」といった、陳述副詞<sup>11)</sup>にも通じる評価的な前提があることは理解できていなかったのだ。それに気がつくまで、しばらく心のモヤモヤが拭えなかったことを今でも覚えている。

### 3. 非母語話者の言語使用から見えるもの—日本語教師の魅力—

筆者は日本語を第二言語として習得し、非母語話者として日本語の研究と教育を進めてきた。外国語学習の経験のある人なら誰しも一度は経験したことがあると思うが、何かと何かを比べることで見えてくるものがある（たとえば日英間の挨拶スタイルの違いや、日韓における「結婚している／결혼했다 [結婚した]」という表現方法の違いといったぐあいに）。比較することではじめて対象間の違いに気がつき、今まで「唯一絶対」だと思っていたことが実はそうではなく「多様である」ことが発見できるのである。筆者が日本語学の研究者・日本語教師をめざして日本への留学を決めた一番の理由は、日本語学習の中で、こうした比較することの楽しさ、そこから見えてくる奥行きのある「3Dの世界」を体験できたからである。

母語話者として（または、母語話者並みに）その言語が話せる・理解できるということと教えることができるということとは別物である。実際、筆者は韓国語母語話者ではあるが、韓国語教師のように教えることはできない。このように、日本語を教えるためには、まず日本語そのものを「観察する」「比較する」「考える」「理解する」というところから始めないといけない。今まで当たり前と考えていた事柄を相対化することで、日本・日本語を再発見することができ、複眼的な視野が得られる。学習者からなぜ日本語では「他人丼」「目玉焼き」「金太郎飴のような社会」という表現を用いるのかと聞かれ、それに答えるための調べものをしたり、反対に外国語ではどういった表現をするのかと聞き返したりすることで、少し大きさに聞こえるかもしれないが、今まで白黒と1次元で見えていた世界がカラーで奥行きのある3次元に見えてくるのである。

#### 注

- 1) ここでは「先生、どちらへ？」や「先生、どこにいらっしゃるんですか」といった表現が自然であるが、待遇表現（敬語等）が自由に使えるレベルにない学生が多く、このような表現になっている。
- 2) 中級レベル以下の場合、漢字を読み間違えるのは漢字圏学習者より非漢字圏学習者のほうが圧倒的に多い。
- 3) 日本語で複数の意味を一語で表しているからといって他の言語でも一語であるとは限らない。実際、「甘い」は、英語で sweet や naive, spoil, not through enough 等、別の語や句で言い表される。
- 4) 前者は野球チーム「カープ」の応援カラーが赤であるため、後者は京都府の景観条例（京都の景観を損なわないように建築物や屋外広告物を緑・茶・濃紺を中心とした色に限定する）が理由である。
- 5) 話し手・書き手が文中に表わす態度（断定、疑問、推量、感動、意志、命令、勧誘、呼びかけ等）が含まれる副詞

（きむ えらん、本学准教授）